

## 事例一覧（プライバシー保護のため一部改変）

### 事例 1

タイトル	世話をしない母親の代わりに第 1 子がきょうだいの世話
支援契機	第 3 子の 1 歳 6 か月児健診で服が汚かった
家族数の変化	5 人 6 人 7 人
把握時の家族と年齢	母（25 歳）妊娠中、父（29 歳）、第 1 子（6 歳）、第 2 子（3 歳）、第 3 子（1 歳 6 カ月）
支援年数	7 年
関係機関	保健所、家庭児童相談員、児童相談所、小学校、中学校、保育園、福祉事務所
特徴	第 4 子は極小低体重で出生し、入院期間が長期になった。父親は子どもに無関心である。第 1 子が第 4 子の世話をし、自分から家事など家のことを行っている。第 1 子は学校でいじめを受け、不登校になり、外出もしなくなった。母親は第 5 子の世話は自分で行っている。母は生活保護を受けている母親の母、姉と毎日のように会い、家庭のことで叱咤されることも多い。母は家が汚くなると訪問を拒否する。 転居もあり保健師が引き継ぎながら支援を継続している。

### 事例 2

タイトル	子どもへの関わり方がわからなくて相談を繰り返す母
支援契機	母親からの相談
家族数の変化	4 人 5 人
把握時の家族と年齢	母（39 歳）妊娠中、父（39 歳）、第 1 子（2 歳）発達遅れ、母の実父（66 歳）
支援年数	1 年 6 か月
関係機関	保健所、保育園、児童デイサービス
特徴	母は子どもはある時期が来ると自然に言葉を話すと思っていたと言い、子どもに話かける必要があることがわかっていなかった。母は子どもにどうかかわってよいかかわらないという。母方の祖父は子どもたちに上手にかかわってくれる。第 1 子に発達障害の疑いがあると母親が判断し、母親はネットを使って自閉症の情報検索をしている。母親が仕事を始めたら頻回に保健師にかかっていた電話がなくなった。

### 事例 3

タイトル	養護施設で育った母親が実父の近くに転居予定
支援契機	福祉事務所からの依頼
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族と年齢	母(27歳)妊娠中、第1子(5歳)、第3子(2歳)発達の遅れ、パートナー(19歳)
支援年数	1年
関係機関	児童相談所、児童デイサービス、小学校、保健センター、保健所、保護課、児童家庭相談員、乳児院
特徴	<p>母親は養護施設で育っている。第1子は近所の同級生が迎えに来てくれて小学校に通学できている。近所の人に助けられて生活している。健診は迎えに行くと受診できる。初めてのことは母親に繰り返し説明が必要である。第2子は乳児院を利用しながら育てた。</p> <p>母親は他市の実父の近くに転居を予定しているが、引っ越しの荷造りができない。引っ越し荷造りの方法を保健師がやって見せて教えている。実父はアルコールの問題を持っている。</p>

### 事例 4

タイトル	読み書きが苦手な母親
支援契機	第2子の妊娠届
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族と年齢	母親(28歳)妊娠中・知的障害、第1子(10歳)療育手帳、パートナー(?)
支援年数	4年
関係機関	保護課(生活保護受給中)、中学校(特別支援学級)、家庭児童相談員、整形外科、
特徴	<p>母親は読み書きが苦手なで不在連絡メモが読めない。オートロックのアパートに居住し、保護課が月1回訪問し支援している。第2子は幼児健診未受診。母親の実母は生活保護を受給し療育手帳を所持している。きょうだいも療育手帳を受給しており頼りになる身内がない。母親はパチンコなどでお金を使ってしまい、第1子の学校に必要な上履きや体操服をそろえることができない。第1子は不登校気味である。母は肥満体で歩くときに杖が必要である。</p>

### 事例 5

タイトル	生活保護受給中の母子家庭にこども（第 3 子）が生まれる
支援契機	小学校から家庭児童相談員に連絡があり地区担当保健師が支援
家族数の変化	3 人 4 人 2 人 3 人
把握時の家族 と年齢	母（31 歳）妊娠中、第 1 子（7 歳）、第 2 子（5 歳） パートナー（父親？）（30 代中頃）精神疾患治療中
支援年数	2 年
関係機関	保護課、児童相談所、主任児童委員、保育園
特徴	第 4 子の妊娠届は生活保護のケースワーカーからの指示で 30 週を過ぎてから窓口に来た。第 4 子の 10 カ月児健診、第 3 子の 1 歳 6 か月健診が未受診である。第 1 子、第 2 子はパートナー（父親）からの身体虐待のために支援開始後に施設入所となる。パートナーは同じアパートの別の階で生活している。第 3 子の保育園入所を勧めたが母親が朝起きられないために週 1 回程度しか通園できなかった。

### 事例 6

タイトル	就学相談で支援学級を勧められたが普通学級を求めて転居
支援契機	医療機関から医療ネグレクトの疑いで支援の依頼
家族数の変化	2 人 2 人
把握時の家族 と年齢	母(30 代中頃)知的障害、第 2 子（7 歳）
支援年数	1 年
関係機関	小学校、家庭児童相談員、医療機関、保健センター、福祉事務所
特徴	母親は中卒、10 代で第 1 子を出産し、離婚している。第 2 子が発熱で入院時に、痩せていること、子どもに菓子パンを食べさせることで病院から通告があった。児童相談所は虐待とは言えないとして関わってはいない。第 2 子は就学相談時には特別支援学級を勧められたが母親が普通学級に通学させたいと転居した。母は PM2.5 の影響が心配と言って子どもにマスクをさせたりするが、学校から連絡された必要なものの準備ができない。第 2 子はやせてひ弱な外見である。

### 事例 7

タイトル	祖父が子育ての中心
支援契機	妊娠届、医療機関からの依頼
家族数の変化	4人 5人
把握時の家族と年齢	母(26歳)妊娠中・知的障害、母の父(60代) 母の母(60代) 母の姉(28歳)知的障害
支援年数	1年
関係機関	保育園、医療機関、障害福祉課
特徴	障害年金が主な収入で市営住宅で生活している。病院助産師の訪問、保健師の訪問を組み合わせ週1回支援し、保育園に入園する。母はミルクの調乳ができなく、母の父(祖父)が調乳しこどもの世話をする。乳児健診、予防接種はきちんと受診している。母は子育てを両親に任せて夜遊びに出ている。

#### 事例 8

タイトル	発達障害を持つ母親の子育て
支援契機	里帰り中の新生児訪問、医療機関からの依頼
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族と年齢	母(36歳) 父(40代) 第1子(0カ月) 母の父(70代) 母の母(60代)
支援年数	3年
関係機関	産科医療機関、精神科医療機関、発達支援センター、児童デイサービス
特徴	里帰り出産したのちに他県にある自宅に帰ったが、その後離婚し、母と児は母親の実家に転居した。母親は会社で上手くいけなく、20代の時に発達障害と診断された。母親が通院しているメンタルクリニックからも保健師に支援依頼が来た。母親は人との距離感をつかむのが苦手である。第1子は発達がゆっくりで、療育手帳を受給した。

#### 事例 9

タイトル	特定妊婦を妊娠中から家庭訪問支援
支援契機	医療機関から特定妊婦として支援依頼があった
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族と年齢	母(38歳)妊娠中、父(32歳) 第1子(8歳)

支援年数	1年
関係機関	医療機関、児童相談所、福祉事務所、子育て課（保育園担当）
特徴	第2子妊娠中に入籍した。生活保護を受給中で、就労支援を受けている。室内は猫の毛、食べかす、たばこの吸い殻などが落ちていて乳児が過ごす環境ではない。母親は具体的に言われたことはできるが、食事を作っているかどうかは不明である。第2子は出生後ほとんど外出していない。

#### 事例 10

タイトル	家にいるのが苦しいという母親
支援契機	転入時に窓口で経済的に苦しい旨を伝え、就労支援を受け、依頼される。
家族数の変化	6人 6人
把握時の家族と年齢	母（26歳）、第1子（3歳）、第2子（0歳）、母の実母（47歳）、母の妹（23歳）、母の妹の第1子（0歳）
支援年数	3年
関係機関	医療機関、福祉事務所、就労施設、
特徴	母親と母の妹が就労しているが、お金の管理、家事、子育ては母親の実母(祖母)が取り仕切っている。母親は真面目であるが、仕事が続かない。母親が突然失踪し、1か月後に戻ってきた。母の実母と母の妹は母親の生活について指示し、母親の収入は母の実母が管理している。母親は家にいると苦しいと話す。母親はうつ病と診断され通院をはじめたが、家族に病名を伝えていない。

#### 事例 11

タイトル	離婚後に経済的な問題を抱えながらの子育て
支援契機	3歳児健診時に母親から相談があった。
家族数の変化	3人 3人
把握時の家族と年齢	母（34歳）、第1子（3歳）、第2子（0歳）
支援年数	6年
関係機関	家庭児童相談室、保育園、就労支援担当
特徴	母親が大声で怒鳴っていると通告があり訪問したが会えず、置手紙をした。一日家にいると第1子がドタバタしてイライラする、経済的な不安について話す。母親が就労後は母親の実家の支援、保育園によって対応

---

できている。こどもの発達はゆっくりである。

---

#### 事例 12

タイトル	母親が育児拒否
支援契機	医療機関からダウン症児の支援依頼が来た。
家族数の変化	4人 4人
把握時の家族と年齢	母(30代) 父(30代) 第1子(9歳) 第2子(0歳)ダウン症
支援年数	7年
関係機関	医療機関、家庭児童相談室、発達支援センター、訪問看護、保育園、小学校、児童相談所、乳児院
特徴	母親は障害があることが妊娠中にわかって以来第2子を受け入れることができない。児は出生時NICUに4か月入院した。父親は人と関わることは苦手な育児、家事を担い、母親が生計を担っている。母親は第1子は可愛がっている。第2子は固形物の経口摂取が難しくラコールを摂取している。胃瘻を勧められるが両親は反対している。第2子が乳児院にショートステイした時に感染し、施設の利用に拒否的である。

#### 事例 13

タイトル	こどもの療育が開始できたことで母が落ち着く
支援契機	第1子と第2子の子育てについて母親からの相談
家族数の変化	5人 5人
把握時の家族と年齢	母(29歳) 父(29歳) 第1子(8歳) 第2子(4歳)発達障害、第3子(1カ月)
支援年数	10カ月
関係機関	療育施設、発達センター、医療機関、保育園
特徴	当初紹介した医療機関が遠く通院が困難であったため、近くの療育施設で相談を受ける体制にした。第2子が受診する医療機関で第1子も服薬治療を開始した。子どもたちの生活が落ち着いてくることで母親の表情もよくなった。受診した様子を母親の方から報告してくれる。

#### 事例 14

---

タイトル	産後 1 か月がパニック
支援契機	母子手帳交付時に母親から訪問依頼
家族数の変化	2 人 3 人
把握時の家族と年齢	母 ( 37 歳 ) 妊娠中・うつ病、父 ( 35 歳 )
支援年数	2 か月
関係機関	医療機関、産科、ファミリーサポートセンター
特徴	出産した病院からエジンバラうつ尺度が 14 点であったと支援依頼が来た。母親はパニックになると自分の頭をたたいたり大声で怒鳴ったりする。母親の実家から母の実母が手伝いに来てくれた。母親は産後 1 か月が大変であったという。

#### 事例 15

タイトル	保健師総出で産後支援
支援契機	母子手帳交付時
家族数の変化	3 人 4 人
把握時の家族と年齢	母 ( 20 歳 ) 療育手帳・妊娠中、母の父 ( 60 代 ) アルコール飲酒問題、母の兄 ( 20 代 )
支援年数	2 か月
関係機関	障害福祉課、福祉事務所、医療機関、家庭児童相談室
特徴	掃除ができていない家に母子で退院した。子どもの沐浴が家族でできないため、退院後 2 週間は行政の保健師等が毎日訪問し支援した。母の父が緊急入院となったため、一時父のきょうだいのところなどで過ごした。兄は母の障害年金を使い込んでしまう。母一人で子育ては無理と母が納得し、隣接市にある母子の施設に入所した。

#### 事例 16

タイトル	高校の生徒が妊娠出産
支援契機	母子手帳交付時
家族数の変化	4 人 7 人
把握時の家族と年齢	母 ( 17 歳 ) 知的障害・妊娠中、母の父 ( 50 代 ) 母の母 ( 50 代 ) 父 ( パートナー ) ( 18 歳 )
支援年数	1 年 6 か月
関係機関	特別支援学校、医療機関、家庭児童相談室、障害福祉課、訪問看護

特徴	母の両親、父の両親、関係機関が集まって出産・子育てについて相談した。入籍するまでは母の実家で生活し、父親の就職が決まってから父親の両親の家に同居し入籍した。訪問看護は児が1歳になるまで続いた。母親は子育てに対して現実感が弱い。
----	---

#### 事例 17

タイトル	収入のない夫婦の子育て
支援契機	福祉事務所から支援の依頼
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族と年齢	母(24歳) 妊娠中、父(24歳) 第1子(4歳)
支援年数	9カ月
関係機関	福祉事務所、保育園、医療機関、児童相談所、家庭児童相談室
特徴	父親の母が息子夫婦が経済的に困窮していると生活保護担当課に相談をしてきた。支援の依頼を受けた保健師が妊娠中に家庭訪問を約束したが何度もキャンセルになった。出産後の育児に向けて関係機関で会議を持ち、役割分担をした。父親が他市に就職が決まったため転出となる。

#### 事例 18

タイトル	離婚調停中の母親
支援契機	第2子の3歳児健診が泣いてできなく、フォローとなる
家族数の変化	6人 6人
把握時の家族と年齢	母(30歳) 第1子(10歳) 第2子(3歳) 第3子(2歳) 母の母(50代) 母の父(60代) 父(33歳) 離婚調停中
支援年数	8カ月
関係機関	特になし
特徴	母親は復縁を期待しているが、父親(夫)は気持ちが離れている。父親の家族は離婚を勧めている。父親からの仕送り、養育費の支援がなく経済的に困窮している。

#### 事例 19



タイトル	困った時に相談してもらえる関係づくり
支援契機	転入について相談があった
家族数の変化	4人 5人 6人 7人 5人 4人
把握時の家族と年齢	母(20歳)妊娠中、第1子(0歳)、母の実母(53歳)、母の兄(23歳)
支援年数	11年
関係機関	児童相談所、保育園、民生児童委員、婦人相談所
特徴	DVで逃げるようにして転入してきたが母親に危機感はなく、母の実母が心配をしていた。母親のパートナー(夫)に子どもが怯えるなどがあり要保護児童対策地域協議会で支援について検討した。母親の仕事、離婚、保育園入園など子育てのみならず母親の生活が安定するように助言をし、母親との関係が切れないように見守り支援を続けた。

#### 事例 20

タイトル	精神疾患の母親の育児を支える
支援契機	母の母(祖母)がDVを受けている娘(母)を他市から連れて帰り、役場に相談した。
家族数の変化	4人 3人 2人
把握時の家族と年齢	母(42歳)精神疾患、第2子(13歳)、第3子(11歳)、母の母(73歳)
支援年数	7年
関係機関	児童相談所、警察、医療機関、福祉事務所、保育園、民生児童委員、小学校、中学校
特徴	他市から要保護児童の転入について連絡があった。母親が精神疾患の未治療で第2子はネグレクト状態で育った。母は受診はするが主治医の指示は守らず自己判断で服薬をする。転入当初は母の実家での同居生活をしてしたが、その後母の実家に近いアパートで生活している。母が家事をせずゲームをしているために親族から非難されている。子どもたちは不登校になったり地域で問題を起こしたりしている。

#### 事例 21

タイトル	うつ病で家事育児が滞る母親の子育て
支援契機	転入時に相談に来所
家族数の変化	3人 4人 5人

把握時の家族 と年齢	母（25歳）うつ病・妊娠中、父（33歳）、第1子（8歳） 第2子（5歳）施設入所中
支援年数	1年
関係機関	児童相談所、医療機関、家庭児童相談室、保育園、民生児童委員、小学校、家事支援サポーター
特徴	母はうつ病のため家事・育児ができなく、児童相談所が要保護児童として支援をしていた。第3子出産に向けて関係者で準備した。母は食事を作れるときもあるが、何もできない時もある。第2子を施設から引き取り、父親の実家に同居するため県外に転出した。要保護児童対策地域協議会として転出先に継続支援を依頼した。

#### 事例 22

タイトル	トラブルメーカーの母親の子育て
支援契機	妊娠届に来所
家族数の変化	4人 5人
把握時の家族 と年齢	母（22歳）妊娠中・療育手帳、第1子（2歳）、母の母（59歳）、母の叔父（60歳）
支援年数	6年
関係機関	児童相談所、医療機関、子育て支援課、保育園、障害福祉課
特徴	母親は攻撃的になるタイプで、仕事が長続きしない。母、母の母（祖母）は役場に相談に来るが、ともにアドバイスをされたことを実行しない。家庭訪問は拒否されるので、来所時にこどもの計測や生活のことを把握するようにしている。母親は周りとは次々とトラブルを起こすタイプで、親身になって相談にのってくれる人がほとんどいなくなった。

#### 事例 23

タイトル	生活を支援していた祖母が脳卒中
支援契機	第1子の1歳6か月健診
家族数の変化	3人 4人 5人 6人 7人 6人 8人
把握時の家族 と年齢	母（28歳）妊娠中、父（第5子出生後に離婚）、第1子（1歳6月） 離婚後は母の実家に同居
支援年数	15年

関係機関	保育園、医療機関、福祉事務所、障害福祉課、児童相談所、子育て支援課、小学校、中学校、青少年センター、母の実母（祖母）のケアマネージャー
特徴	保健師が引継ぎをしながら支援した。母親は家事育児ができず母の実母（祖母）が支援していたが脳卒中でできなくなった。子どもたちは不登校になった。月1回は生活保護の窓口に来る。要保護児童対策地域協議会で見守りを続けている。

#### 事例 24

タイトル	子どもに暴力の連鎖
支援契機	保育園から母親の妊娠について連絡
家族数の変化	6人 7人 7人
把握時の家族と年齢	母（34歳）、第1子（12歳）、第2子（8歳）、第3子（7歳）、第4子（2歳）、第5子（1歳） 父（第6子出産後に離婚）
支援年数	11年
関係機関	児童相談所、警察、医療機関、福祉事務所、子育て支援課、保育園、小学校、中学校、女性相談所、養護施設
特徴	実家親族の支援者がいない。父からのDVで母は母子寮に入居して離婚した。第2子が第1子から暴力を受けていることがわかり、第2子、第5子、第6子は施設に入所した。高校生になった第2子が第3子、第4子の生活を心配している。母は就労しているが、ガスは止められている。要保護児童対策地域協議会で見守りを行っている。

#### 事例 25 長弘 1

タイトル	保健師が最後までうまく関われなかったと感じている事例
支援契機	自閉症の疑いと診断された母親が来所相談
家族数の変化	5人 6人 5人
把握時の家族と年齢	母親（34歳）精神疾患、第1子（女14歳）、第2子（男12歳）、本児：第3子（男3歳）、第4子（女1歳）
支援年数	3年1ヵ月
関係機関	医療機関（小児科、精神神経科）、養護施設、福祉事務所、児童相談所
特徴	第3子の言葉の遅れを指摘され（転入前）、大学病院受診し自閉症の疑いを指摘された。母親が離婚、転入し、自閉症疑い・皮膚アレルギーの相談にき

た。アレルギー症状がひどく、様子観察のため家庭訪問するも不在が多く、困ったことがあれば保健師に相談に来た。

母親は統合失調症のため受療中で服薬管理はできているが、こどもの世話をしない状態であった。生活保護ケースワーカーを通じて健診や予防接種の指導をするも来所せず、うそや取り繕うことが多かった。第5子はパートナーが異なり、発達に遅れがみられ施設訓練が必要であるが通園させていない。第5子が1歳の頃、3~5子の施設入所の相談をした経緯がある。第4子は養護施設入所し、隣市への転出で支援終了。第3子以降は健診や予防接種を受けていなかった。

#### 事例 26

タイトル	保護観察中のパートナーとネグレクトで育った10代の母親
支援契機	祖母が高2の娘のために母子健康手帳を取りに来たことで把握
家族数の変化	5人 2人
把握時の家族と年齢	母(17歳)精神疾患、母の母：祖母(42歳)うつ病、母の父：祖父(服役中)、母の妹：叔母(12歳)、母の弟：叔父(7歳)
支援年数	3年10ヶ月
関係機関	保健所、児童相談所、福祉事務所、保育園
特徴	母親はパニック障害があり、祖父不在、祖母にうつ病、小中学校の頃にネグレクトであり、小中学校不登校のため他部署で見守り支援中であった。 高2で妊娠し、祖母が「困った、困った」と母子健康手帳を取りに来た。高校中退後に出産し、母親家族と別居し、同アパートの別室に居住、生保となる。パートナーは部屋に注射器があったことから通報された。 その後母子寮入所するも飛び出した。母親は不眠、うつで精神科で治療中、部屋は若者のたまり場となっており、保健師が訪問しても部屋に入れてもらえない。児には問題はみられないが健診未受診である。保育園入所し、食事と保育園通園が課題である。

#### 事例 27

タイトル	車椅子生活でVDをする夫をもつ発達障害の母親
支援契機	母親より1歳半健診時に児に対する父親の叱責が厳しいと相談があり、介入を試みるもうまくいかず、3歳児健診で再訴えがあり、児の発達障害がわかった
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族と年齢	母親(31歳) 父親(31歳) 本児(男1歳半)
支援年数	7年
関係機関	児童相談所、医療機関、福祉事務所、保育園、小学校、家庭児童相談室
特徴	転入事例。父親は17歳で事故に遭い下半身麻痺となり車椅子生活で、母親が28歳で結婚。母親は軽い知的障害?(理解度が低い)があり、本児が1歳半の時に転入してきた。3歳児健診で体重増加不良、多動が

みられ、ADHD と判定された。介入が困難で父親より「生活に口出すな」といわれ、母親がリュウマチのため保育園入所となる。保育園とのトラブルが多く、発達支援センターが担当することとなった。平成 23 年に第 2 子が生まれたが、特に異常はないが父親は時に言葉による叱責はみられる。

父親は被虐待の経験があり、母親に対し言葉による DV、こどもに対する DV が見られる。両親は共依存の関係が認められている。

## 事例 28

タイトル	発達障害を認めたくない祖父母と葛藤し対応が遅れた母親
支援契機	乳児健診でよだれを呑み込めない、運動発達が遅れ気味であり、児童相談所と協議し経過を観察となる。3 歳児健診でも遅れを指摘されたにも関わらず母親が専門機関へ受診ができなかった。
家族数の変化	3 人 5 人
把握時の家族と年齢	母親 (31) 父親 (31) 本児 (男 1.5 歳)
支援年数	13 年間
関係機関	児童相談所、医療機関、幼稚園、小学校、中学校、教育大学
特徴	母親の実家が近くにあり、実家との関係は良い。母親は幼少時より両親より厳しく育てられた。知的発達は問題なかったが、運動発達が遅れ気味であった。母親は健診毎に専門機関を進められるも対応できなかった。小学 3 年より絵や文字が書けないなど学習上の課題が生じ特学通級となる。父親は会社員。母親に精査を勧めるも受け入れができず、あるいは予約した専門機関を当日ドタキャンすることが 2 回あり、診断および早期対応が遅れた。母親が祖母に相談すると「育て方が悪い」と一喝され、母親の責任とされたため、受診ができなかった。第 2 子男児・3 子女児が誕生し他が特に異常はみられない。 母親は知的レベルの高い家庭で育ち、祖父母に対し怖いと感じていた。

## 事例 29

タイトル	ネグレクトで育ち中学卒業直後に出産した母親
支援契機	中学 2 年生時に不登校で夜間徘徊があり、通報され、見守り支援を受けていた。中卒直後に父親不明で出産、特定妊婦として医療施設より情報提供あり。
家族数の変化	3 人 4 人
把握時の家族と年齢	祖父 (56 歳) 母親 (14 歳) 叔母 (13 歳)
支援年数	8 年
関係機関	中学校、保育園、医療機関、民生児童委員、家庭児童相談室

特徴	<p>母親は、祖父と母親の妹と3人暮らしであったが、中学2年の頃より不登校で把握・見守り支援をされていた。読み書きは不十分で、計算ができないなど知的レベルが低い口達者である。父親不明のまま妊娠・出産し、特定妊婦として医療機関より情報提供があった。</p> <p>別所帯となり、養育未熟、うつ状態で生活保護受給となり、乳児(女)は保育園入所となった。家事はできず弁当等を食べており、乳児健診未受診、予防接種未摂取であった。その後4人と結婚離婚を繰り返し、40歳台の夫(うつ病で治療中)と3人暮らしである。</p> <p>実家とは疎遠で、祖父は借金をかかえ、脳出血・うつ病で母の妹と同居し、祖母(自殺企図あった)とは離婚していた。</p>
----	---

### 事例 30

タイトル	医療施設からの依頼された飛び込み出産事例
支援契機	飛び込み出産をした医療施設より、母親の支援を依頼された
家族数の変化	2人 3人
把握時の家族と年齢	母親(34歳) 本児(男出生直後)
支援年数	8年
関係機関	医療機関(産科、精神科) 保育園 小学校
特徴	<p>母親は、精神疾患で治療中であるが保険会社に勤務。知的にはボーダーのレベルでお金の管理がうまくできないこともあり、経済的に困窮。話が好きで仕事には熱心。愛人関係の父親とは交流は多くはない。母親もネグレクトのようであるが実家との関係はよい。</p> <p>第1子は、発達障害(ADHD)のため特別支援学級に入学し、第2子(男)とも関わりは薄く、ネグレクトの状態である。母親は感情処理がうまくいかない時はこどもに暴力をふるうことがある。</p> <p>窓口や電話にて時々相談することで、感情コントロールがうまくいくようになった。</p>

### 事例 31

タイトル	パートナーからのDVが疑わしい統合失調症の母親
支援契機	医療機関より精神疾患の妊婦支援依頼
家族数の変化	2人 3人 1人
把握時の家族と年齢	母親(30歳) パートナー(36歳)
支援年数	1年
関係機関	医療機関 保健所 児童相談所 福祉事務所 家庭児童相談室
特徴	<p>母親は実の父親(祖父)の死後に祖母が蒸発した結果、親戚に引き取られて育てられた経験を持ち、精神疾患で治療中であった。飲食業のパー</p>

トナーと共に就労しており、産後も早急に就労するようにパートナーより言われていた。

パートナーは感情コントロールがうまくできず、母親に対し言葉の暴力がひどかった。実家の支援も得られず、産後はパートナーと離れて暮らしたいという希望があり、パートナーと別れ貯金を取り崩しながら生活している。

男児に対して精神状態が悪い時は世話をせずネグレクトの可能性がみられ、こどもは児童相談所の一時保護となった。その後、県外へ転出となった。

### 事例 32

タイトル	共に精神疾患の両親をもつこども達への支援
支援契機	小学校よりネグレクトの疑い、近所からの通報
家族数の変化	6人 3人
把握時の家族と年齢	母親(37歳) パートナー(42歳) 第1子(女18歳) 第2子(女15歳) 第3子(女11歳) 本児：第4子(男7歳)
支援年数	2年
関係機関	中学校、小学校、福祉事務所、保育園、医療施設
特徴	母親は被虐待経験があり、精神疾患で通院中。パートナーは運送の自営業で借金をかかえ経済的に困窮状態で、不眠のため眠剤・安定剤を服用中である。 第1子が眠剤・安定剤を服用中しながら、第3～4子の世話をしていた。第2子は更正施設に入所中である。第3子は父親が異なり、発達障害のため療育手帳を交付されており、児童相談所の一時保護中である。子どもに対する愛着はあるが、改善はみられない。 最近、第1子が自立し一人暮らし、第5子は生後3ヵ月で祖母(父の母)が引き取り保育所へ通園している。第4子と両親の3人家族となったが、ネグレクトは改善されない。

### 事例 33

タイトル	母子保健担当と家庭児童担当との連携プレーによる支援事例
支援契機	医療機関よりこどもの心疾患定期管理の未受診のため通告を受けての支援
家族数の変化	2人 5人
把握時の家族と年齢	母親(23歳) 本児(女2歳)
支援年数	2年6ヵ月
関係機関	医療機関 児童相談所 保育園 母子保健分野
特徴	転入事例

母親は継父(母の兄)よりネグレクト被虐待の経験があり、感情コントロールができずカッとなりやすく判断力も乏しい。飲食関係で働き、性感染症で治療したことが何度かある。パートナーは3人いるが同居はしていない。第2子は生後3ヵ月で深夜に窒息死した。

祖父母と同居し祖父母がこどもの面倒をみている。児は保育園に通園し、身体にあざがあったことやこどもの言葉より身体虐待が疑われた。心疾患で管理中であるが、健診は未受診。居室内はゴミがあふれている。

#### 事例 34

タイトル	特定妊婦の連絡を受け、母子保健担当者と連携を組んだ事例
支援契機	大学病院より母親が適応障害で治療中であるが、こどもを抱こうとしない
家族数の変化	2人 4人 3人 1人
把握時の家族と年齢	母親(21歳) 本児(0歳) 祖母(40台) 祖母の妹(40台)
支援年数	4～5ヵ月
関係機関	大学病院 児童相談所 母子保健分野
特徴	<p>母親は小学校低学年で祖母の家出で(本人：捨てられ)、祖父のもとで生活し、その時期に祖父より暴力を受けていた。その後祖母と同居した。</p> <p>今回は祖母の勤めで妊娠を継続し、祖母より子育てのお金を出してもらうことと祖母が育てることで出産をすることになった。特定のパートナーは存在せず父親ははっきりしない。</p> <p>産後、母乳ダイエットとして熱心に授乳は行ったが、他の世話は祖母まかせで、気に入らないときは祖母に暴力をふるった。生後3ヵ月で授乳をやめ、全く世話をしなくなった。本人の希望で児は乳児院入所となった。母親に知的障害はないが、産後は適応障害の治療が中断し、感情の起伏がみられた。祖母の支援を受けたくないと一人暮らしを始め、転出した。</p>

#### 事例 35

タイトル	母に暴力をふるう男子中学生への支援
支援契機	中学校スクールソーシャルワーカーより母に暴力をふるう生徒の支援を依頼された
家族数の変化	2人 3人 1人
把握時の家族と年齢	母親(40歳) 本児(男14歳)
支援年数	1年6ヵ月



関係機関	中学校、教育委員会、児童相談所、医療機関
特徴	<p>母親はパニック障害とアルコール依存症の疑いで精神科受療中であるが中断している。母親は判断力、育児力が低下しており、中学生の息子と2人の生活保護世帯であった。</p> <p>母親は祖母が離婚し、幼少時に被虐待の経験があり、近くに実家があるも疎遠であるが、時々活用していた。</p> <p>パートナーと同居したことで、パートナーと本児の関係が悪く、母親はパートナーよりDVをうけた。入籍話で母親は本児より初めて暴力を受け、肋骨を骨折した。その後も母親への暴力があり、母親が刃物を持つようになり、母親は祖母宅に転居し、本児は一時保護により施設入所となり、安定している。</p>

### 事例 36

タイトル	積極的に関わろうとすると拒否され見守り支援となった事例
支援契機	コンビニでこどもがパンを取って食べたと警察より児童相談所へ送致され、市町村での対応を求められた
家族数の変化	母の実家7人 アパート7人
把握時の家族と年齢	母(27歳) 父(33歳) 祖母(57歳) 祖父(59歳) 本児：第1子(男4歳) 第2子(女1歳) 第3子(女0歳)
支援年数	3年
関係機関	警察署、児童相談所、医療機関、幼稚園、小学校
特徴	<p>母親はうつ病で気分の波があるが精神科通院は中断し、人見知りが強く、SOSを表さない。父親は就労しているが困窮状態と思われるが夫婦とも困窮感はない。第4子(女)誕生し、特に問題はないが、健診は10ヵ月健診のみ受診。第5子(男)は先天性心疾患、脳性まひで重度障害児である。在宅酸素療法が必要であるが、生後3ヵ月以降受診せず。</p> <p>他町より転入事例であるが、児の健診未受診、予防接種未摂取。</p> <p>第1子は小柄で痩せ虫歯が多く、他児童より小さく見え、第2子は紙パンツ、下着姿で川べりを歩いていて保護、第3子は肺炎にて緊急入院となるなど、通報や連絡があるも介入を拒否され、支援を控えることがあった。問題と感じていない、困っていないので支援を拒否された。</p> <p>負の連鎖を断ち切りたいと思いつつも、将来が心配なこども達である。</p>

### 事例 37

タイトル	祖母の同年齢のこどもと一緒に育つ孫の事例
支援契機	医療施設より未熟児で母親の養育能力の低下が疑われるとの連絡があった。
家族数の変化	3人 5人
把握時の家族と年齢	母(19歳) 父親(21歳) 祖母(40台前半)
支援年数	4年
関係機関	医療機関 保育園

特徴	<p>母親は、祖母がタイ人と祖父は日本人のハーフで、両親の離婚後祖母のもとで父親不在の状況で育ってきた。小中学校では不登校がみられ、高校中退し、妊娠出産となった。</p> <p>病院より 2000 g の低出生体重の男児(第 1 子)であり、母親の精神年齢が幼く、養育能力の低下が疑われると、退院前に情報提供があった。母親は、結婚 1 年で離婚し本児を祖母のもとで育てることとなった。同時期に祖母に女兒が生まれ、4 人家族となった。本児はことばの遅れがみられ、発達障害の疑いがある。</p> <p>祖母の収入に頼った生活で、母親は家で昼夜逆転の生活をし、経済的に困窮の状態であった。</p> <p>その後 50 代のパートナーとの間に女兒(第 2 子)が生まれた。女兒は発育発達に問題はないようである。朝食は未摂取で保育園に登園させ、保母のアドバイスを受け入れず、嘘をつくことが多かった。祖母をキーパーソンとして受け入れられる範囲内で支援していたが、隣町に転居した。</p>
----	---

### 事例 38

タイトル	少年鑑別所に入所できないと弁護士より支援を依頼された妊婦
支援契機	弁護士より妊娠出産の為に少年鑑別所に入所できないが、今後出産育児支援が必要であろうと相談があった。
家族数の変化	3人 4人 3人 2人
把握時の家族と年齢	祖父(56歳) 母親(16歳) 母の弟(14歳)
支援年数	1年6ヵ月
関係機関	児童相談所 医療機関 重度障害児施設
特徴	<p>母親は、両親の離婚後弟と父親に厳しく育てられた。厳しい父親を怖がり、嫌い家出。パートナー不明のまま妊娠した。出産後、男児は重度心身障害がみられ入院をへてそのまま施設入所。母親は児の障害が判りメイクが派手になり、飲酒、約束を守らない行動を取るようになった。病院へ面会も行かなくなり家出をし、そのまま転出となった。</p> <p>転出後、結婚し第 2 子が誕生し、夫を連れて第 1 子の面会に行くようになった。</p>

### 事例 39

タイトル	被虐待児に自分の将来像が描ける方向に向けて支援した事例
支援契機	転入時に予防接種の説明をした際に母親の態度に疑問を感じた
家族数の変化	6人 2人
把握時の家族と年齢	母(26歳)第 1 子(女 5 歳) 第 2 子:本児(男 3 歳) 母の母:祖母(54 歳) 母の姉:叔母(28 歳)
支援年数	17 年(途中途切れた時期もふくめ)
関係機関	児童相談所 医療機関 福祉事務所 小中学校 保育園 民生児童委員
特徴	母親は双極性障害のため感情コントロールが難しく、障害者手帳を保有

している。また知的障害がみられ中学生の頃は特学で金銭管理はできない状態であった。母親の姉は精神障害でグループホームに入所し、母が祖母に虐待をするようになり、キーパーソンであった祖母は施設入所となった。第1子も精神疾患のため施設入所。公営住宅の居室内はゴミが散乱し、母親が調理・掃除しないこともありヘルパーの派遣をしたが、継続しなかった。

本児は小学校の頃から学校を休むことが多く、中学1年より不登校状態であった。知的レベルは高く、環境を改善するために養護施設入所を勧めた結果、本人の希望で入所し、高校を卒業した。養護施設を退所後は自宅に戻り、閉じこもり状態で外出は時折パチンコに行く程度。

転入後生まれた第3子(妹)は発達等に問題はなく、高卒後パティシエになるため家を出て、自立している。

#### 事例 40

タイトル	4歳の娘が乳児のおむつを交換している事例
支援契機	第3子の新生児家庭訪問により把握
家族数の変化	5人 4人
把握時の家族と年齢	母(25歳) 祖父母(40・50台) 第1子(女3歳) 第2子(女2歳) 第3子(女0歳)
支援年数	23年(途中途切れた時期もふくめ)
関係機関	児童相談所 福祉課 福祉事務所 小中学校
特徴	<p>家庭訪問時の居室内のゴミや不潔な状況、母親の知的レベルの低さから生じる理解力、判断力の低下が見られたが、祖父母との関係は良好。</p> <p>母親は、離婚後母子寮に入寮、その後結婚、離婚し祖父母のもとに戻ってきた。月のうち半分働き、休みの時はパチンコに行き、子どもはネグレクト状態。祖父母が働いており、経済的問題はなかった。第3子の世話は第1子が行うなど放任状態であった。第1子、第2子はそれぞれ独立し、祖父母と母親と第3子の4人暮らしである。</p> <p>第3子は小学校高学年より不登校状態であったが、本を読むことや計算はできる。正規職として就職がなく、郵便局のアルバイトをしている。「中卒だから就職ができない」という第3子の言葉が重く感じられる。</p>

#### 事例 41

タイトル	母、姉、祖父より叩かれるので家に帰りたくない小学生
支援契機	児童が帰りたくないと言っていると小学校からの通告
家族数の変化	5人 4人
把握時の家族と年齢	母(45歳) 祖父(70歳) 第1子(女14歳) 本児:第2子(女9歳) 第3子(男7歳)
支援年数	1年
関係機関	児童相談所 福祉事務所 小中学校 民生児童委員 家庭児童相談員
特徴	母は夜勤専門看護師として就労し、祖父(要介護・糖尿病)の介護をして

いる。当初は祖母や叔母(母の妹)がこどもの世話をしていたが死亡や自立により現状となった。祖父は、母が不在の夜間はこどもを杖で叩いて世話をしていた。第1子が本児に対し、グズグズしていると言って蹴ることがあり、暴力をふるわれるので帰りたくないと言っている。

第3子はADHDのため内服治療中で児童扶養手当を支給されている。第2子、第3子は学習がついていかない状態である。母親への介入をするも虐待を認めず、昼間は出かけて不在のことが多く、祖父の借金のために、自宅を売却し転出となった。

#### 事例 42

タイトル	しつけが厳しすぎると近所からの通報で部局連携で試みた事例
支援契機	しつけが厳しくこどもがいつも泣いていると近所から通報
家族数の変化	父(22歳) 祖母(67歳) 本児：第1子(女2歳)
把握時の家族と年齢	3人 6人
支援年数	14年
関係機関	児童相談所 福祉課 福祉事務所 小学校 保育園 家庭児童相談室
特徴	父親は、祖母による攻撃で母親と離婚し、児が4歳の時におとなしい女性と再婚した。父親に精神疾患は見られないが、言葉による攻撃が激しく、警察がいることもある。祖母は電動車椅子生活で障害年金を受給している。父親以上に言葉の攻撃が激しく、しつけも厳しい。再婚後1年間保育所入所するが、身体にアザがみられ、痩せてきたため、一時保護となった。6歳の頃第2子(女)が生まれ、8歳で第3子(男)が生まれた。平成24年第1子は10歳で児童保護による入所となり、翌25年祖母は75歳で施設入所となった。 健診や予防接種は3児とも全部受けていた。

#### 事例 43

タイトル	母親がうつ病で自殺企図を繰り返す事例
支援契機	養育医療の申請手続き
家族数の変化	6人 6人
把握時の家族と年齢	母(21歳) 父(31歳) 祖父母(50~60台) 第1子(男1歳) 本児：第2子(女)
支援年数	1年7ヵ月
関係機関	医療機関 福祉事務所
特徴	36週で帝王切開により1634gで出産、児はそのままNICU入院となる。生後48日で未熟児訪問し、母親にEPDSを実施した。結果得点が10点と高く、疲労感、頭痛を訴えた。第1子の時は、大学2年で妊娠中退して出産子育てをした。今回第1子は実家に預けているが、疲労感が取れない。同居の祖父母は就労しており、昼間は母親と乳児のみであり、

死にたい気持ちが強くなり、飛び降りようとして事故となった。保育所入所を勧めるもままならず、精神科受診となった。その後も自殺企図が見られたが、家庭訪問で経過観察し、医療機関と連携を取ってきた。

第2子の発達は緩やかであるが問題は見られないこと、うつ病の服薬治療を継続できていることなどで終了した

#### 事例 44

タイトル	夫からのDVと妊娠高血圧の中での子育ての事例
支援契機	妊娠届出時に妊娠高血圧がみられた事例
家族数の変化	5人 8人
把握時の家族と年齢	母(32歳) 父(50歳) 第1子(女7歳) 第2(女5歳) 第3子(女2歳)
支援年数	5年
関係機関	児童相談所 小学校 保育園 家庭児童相談室
特徴	<p>母親は、父親が異なる第1子を飛び込み出産し、以後現父親とのこどもを合わせ計6人のこどもを出産した。第4子女児の妊娠届け時に妊娠高血圧を指摘され、第5子男児、第6子女児とも高血圧で、第6子の時は専門病院受診、紹介、説得、入院治療を行った。</p> <p>父親はアルコール依存症の疑いがあり、母親は父親にDVを受けていた。子どもに対し身体暴力をすることもあった。経済的に困窮状態であるがそれなりの生活をしており、お金の使い方が課題であった。</p> <p>第4子はことばの遅れを指摘されるが経過観察の状態である。こどもへのDVで児童相談所への通告があり、滞納による保育園への休園などその問題についてチームで対処してきた。</p>

#### 事例 45

タイトル	障害者の両親をもつこども達への支援事例
支援契機	県外市町村よりケース移管された、妊婦健診で把握された要支援事例
家族数の変化	4人 6人
把握時の家族と年齢	母(29歳) 父(29歳) 第1子(男7歳) 第2子(男6歳)
支援年数	2年8ヵ月
関係機関	児童相談所 医療機関 小学校 療育センター
特徴	<p>母親は解離性障害(精神障害者)で感情のコントロールが難しい状態であり、家事援助の必要性があった。父親は知的障害者で、母親の指示で動く状態である。生活保護と障害年金で生計を立て、両親の実家とは断絶状態である。</p> <p>第1子は障害があり療育センター通所、第2子はADHDとともに体重増加不良であった。</p> <p>転入後生まれた第3子(女4歳)は重度の発達障害のため療育センター通所、第4子(男)は特に問題はみられないが発達が遅れ気味である。両</p>

親とも同時に2つのことができず、対人関係が困難である。

---

#### 事例 46

---

タイトル	小学校低学年のこども達が家事をする事例
支援契機	小学生の不登校、保育所の長欠の相談
家族数の変化	3人 3人
把握時の家族 と年齢	母(27歳) 第1子(女9歳) 第2子(7歳)
支援年数	1年
関係機関	児童相談所 小学校 保育園 民生児童委員 警察
特徴	<p>母親は6年前に離婚し県外より転入してきた。母親に障害や疾病は見られないが、夜に就労しているため朝起きれないとされている。転入直後より2人のこどもが夜歩きするなど近所の通報で児童相談所が把握していたが、経過観察中であった。第1子が夏休みになると第2子は保育所を長欠し、小学校への不登校が始まり、こども家庭課が支援することとなった。</p> <p>家事をこども達が行っており、母親に介入するも朝食の欠食などネグレクトは改善せず、見守り体制中である。夜の就労についても「働かないとしょうがない」とのことである。</p>

---

#### 事例 47

---

タイトル	養育力の低い母親と窃盗事件を繰り返す父親のいる世帯への支援
支援契機	消防署から救急要請の電話が頻回にあると連絡があったことと、病院よりハイリスク妊婦支援の依頼があり支援を開始した。
家族数の変化	3人 4人
把握時の家族 と年齢	母(24歳) (第3子妊娠中)、父(24歳)、第1子(3歳)
支援年数	7年
関係機関	市町村、児童相談所、医療機関、民生児童委員、社会福祉協議会、自治会
特徴	<p>母親は身体表現性障害でパニックになることがあり他者との関係形成が苦手である。父親は窃盗事件を繰り返しており、母親へのDVもあった。両親ともに依存しあっており、養育力が弱い家庭である。第2子は4か月時に気管支閉塞で死亡</p>

---

#### 事例 48

---

タイトル	短期間で濃厚に関わった母子家庭への転出支援
支援契機	保育園より母親が粗暴で感情の起伏があると要保護児童対策地域協議会へ連絡が入り、保健師へ支援依頼があって支援を開始した。
家族数の変化	3人
把握時の家族と年齢	母(20代)、第1子(3歳)、第2子(2歳)
支援年数	4か月
関係機関	2か所の市町村、保育園
特徴	母親の対応の仕方や言葉遣いがあらく、幼児の子ども2人を置いて出かけることがあった。また、子どもが母親の顔色をうかがっておびえる様子があった。

#### 事例 49

タイトル	「わかってます」が前提の大きい声で怒鳴る母親の子育て支援
支援契機	3歳児健診のときに、母親からこどもの発達が気になると相談がありその場で泣き出したため、支援開始となった。
家族数の変化	4人 3人
把握時の家族と年齢	母(38歳)、父、第1子(3歳)、第2子(0歳)
支援年数	4カ月
関係機関	市町村、家庭児童相談室、婦人相談所、親子教室スタッフ
特徴	母親は泣くか笑うかの感情起伏が激しい母親で、役所内でも子どもを大声で怒鳴ることがあった。父親と離婚後は生活に困るが、追い込まれている状況がわからず、定職につけない。

#### 事例 50

タイトル	母子家庭で兄から弟への暴力を真似するケース
支援契機	知的障害がある母親の支援で長期間保健師が関わっている。
家族数の変化	5人
把握時の家族と年齢	パートナー(不明)、母(37歳)、第1子(15歳)、第2子(13歳)、第3子(3歳)
支援年数	18年
関係機関	市町村、家庭児童相談課、保育園、相談支援センター
特徴	第1子が第3子への暴力をし、第3子が真似して保育園で友人の首をし

---

めたり、第4子を傷つけたりすることがあった。母親へ第1子への対応の方法について助言するが、なかなかよくならなかった。

---

#### 事例 51

---

タイトル	多くの関係機関と連携して支援した事例
支援契機	県外からの転入事例で乳児健診後期で母親から相談があり支援を開始した。
家族数の変化	3人
把握時の家族と年齢	母(20代)、父(40代)、第1子(0歳)
支援年数	3年6カ月
関係機関	市町村、家庭児童相談室、親子通園、児童センター、NPO いっぽ
特徴	母親は統合失調症であり妊娠中に大学の精神科に入院していた。父親の転勤で出産して数カ月後に本県へ引っ越した。母親は月経前に体調不良と不安感があるため、精神科受診を保健師が勧めるが、父親が母親の内服を拒否したため、現在内服を中断している。

---

#### 事例 52

---

タイトル	乳児がいるのにきれいにされていないおうちへの訪問事例
支援契機	こにちは赤ちゃん事業で出生体重が4kg以上は保健師の訪問対象となるため、訪問した。
家族数の変化	3人
把握時の家族と年齢	母(30代)、父(30代)、第1子(0歳)
支援年数	6か月
関係機関	市町村、医療機関
特徴	第1子が4カ月の時には体重が約10kgあった。父親の前妻が使っていた部屋をそのまま使っており、前妻の子が書いた絵が貼られていたり、片づけられていない部屋の中で生活している。

---

#### 事例 53

---

タイトル	訴えが少ない母親への支援
------	--------------

---



支援契機	児童家庭課より第1子の児童虐待の疑いがあり、新生児訪問を実施した。
家族数の変化	4人 3人
把握時の家族 と年齢	父(31歳)、母(32歳)、第1子(小3)、第2子(0歳)
支援年数	4か月
関係機関	2か所の市町村、児童家庭課、小学校
特徴	母親へ第2子の訪問時に、父親や第1子の育児で困っていることを聞か がほとんど聞けなかった。第2子の生後5か月時に離婚した。

#### 事例 54

タイトル	出産後も自分中心な生活を送る母親への支援
支援契機	他市からの転入で、第1子出産後に助産師訪問の対象だったが、保健 師が訪問することになり、新生児訪問をしたことから支援開始となった。
家族数の変化	3人 2人
把握時の家族 と年齢	母(32歳)、父(41歳)、第1子(0歳)
支援年数	3年
関係機関	市町村、児童家庭課、ファミサポ
特徴	父親がうつ病で父親に対する不満やストレスを抱えながら子育てをして いた。子どもがギャーっとわめくように泣いていた。

#### 事例 55

タイトル	若年出産の子と家庭を支える支援
支援契機	母子健康手帳交付時に14歳の若年妊婦であったことから支援開始とな った。
家族数の変化	5人 6人
把握時の家族 と年齢	母の母親(37歳)、母(14歳)、パートナー(16歳)、母の兄(19歳)、母の兄 (17歳)、母の弟(1歳)
支援年数	1年5か月
関係機関	市町村、児童家庭課、児童相談所、中学校、医療機関
特徴	14歳が妊娠27週で第1子を出産した。出産して数か月後にパートナ ーに新しい彼女ができてパートナーとは別れた。

#### 事例 56

タイトル	耳だれがある 2 児を病院へ連れて行かない母親への支援
支援契機	保育所から児童家庭課へ耳だれのある児を受診させない母親の件で連絡が入り、保健師へ支援依頼の連絡があった。
家族数の変化	6 人(離婚後に実家在住) 6 人(再婚)
把握時の家族と年齢	母(24 歳)、第 1 子(6 歳)、第 2 子(2 歳)、
支援年数	3 年 7 カ月
関係機関	市町村、児童家庭課、保育園、小学校
特徴	母子手帳交付の時期が第 3 子は妊娠 22 週、第 4 子は 32 週で第 4 子は無保険で出産した。母親は何を言ってもにこにこして返事はよかった。

#### 事例 57

タイトル	両親ともに精神疾患(統合失調症)を抱えながら子育てをしている世帯
支援契機	両親ともに精神疾患の治療中であるため、第 1 子出産時に保健所保健師から市の保健師へ情報提供があり支援開始となった。
家族数の変化	3 人 4 人
把握時の家族と年齢	母(20 代)、父(30 代)、第 1 子(0 歳)
支援年数	12 年
関係機関	保健所、市町村、医療機関、福祉事務所、小学校、障害者支援センター、訪問看護
特徴	父方実母の干渉による精神科疾患の治療妨害のせいで両親の病状が不安定になり、家庭環境を悪化させていた。

#### 事例 58

タイトル	知的障害の母と乳幼児 2 人の母子世帯
支援契機	第 5 子の母子健康手帳交付時面談にて支援が必要な世帯と判断し、支援開始となった。
家族数の変化	4 人 3 人
把握時の家族と年齢	母(37 歳)、パートナー(50 代)、第 5 子(妊娠中)
支援年数	2 年

関係機関	市町村、家庭児童相談員、医療機関、NPO いっぱ
特徴	知的障害があり 1 人目のパートナーとの間で第 1 子を産むが別れた。2 人目のパートナーと結婚して 3 人の子供を産むが離婚した。3 人目は既婚者で DV をするパートナーで間には二人の子どもがいる。

#### 事例 59

タイトル	子どもの生活衛生に関心が低い母親への支援
支援契機	多子で離婚後に母子家庭で生活保護を開始することになり、保健師が支援を開始した。同年、保育所から第 6 子のしらみの件で連絡があった。
家族数の変化	8 人 7 人
把握時の家族と年齢	母(40 代)、父(40 代)、第 1 子(18 歳)、第 2 子(15 歳)、第 3 子(10 歳)、第 4 子(8 歳)、第 5 子(6 歳)、第 6 子(3 歳)、第 7 子(0 歳)
支援年数	5 年
関係機関	市町村、児童相談所、医療機関、家庭児童相談課、小学校
特徴	離婚前より両親が生活費でもめることが多かった。離婚後は母子で多子世帯、生活保護が開始となる。第 4 子、5 子、6 子にしらみがあり保健師が訪問してしらみ駆除をするが、しらみは全くよくならなかった。また、自宅内もごみや物が散乱していて足の踏み場もない状態だった。

#### 事例 60

タイトル	産後 4 か月目までの頻回支援
支援契機	母親から新生児訪問の依頼
家族数の変化	3 人 3 人
把握時の家族と年齢	母(35 歳)、父(34 歳)、第 1 子(1 か月)
支援年数	10 カ月
関係機関	医療機関、子育て支援センター
特徴	出産 1 か月後に転入した。新生児訪問で母親から眠れないと相談があった。エジンバラ産後うつ尺度 (EPDS) の得点が高く、医療機関の受診に同行した。頻回に訪問や電話で支援をした。産後 4 か月ごろになると母親の表情が明るくなった。